

2016年5月15日 召天者記念礼拝メッセージ

聖書：創世記23章1～20節

説教：サラを葬るアブラハム

1 妻サラの死

いまからおよそ四千年前のことです。アブラハムとその妻は、いまのイラクにあたる地域で生まれ、のちに神の声に従ってカナンの地に移り住んでいきます。決して順調な結婚生活ではありませんでした。

日本の古い伝統では、結婚した女性は必ず子どもを産まなければならない、もし子どもができなければ離婚させられても文句を言えない。そういう時代がありました。

アブラハムの時代も同じでした。この夫婦は子供ができないということできずと苦しみます。子どもことで二人の間でいさかいがあったこともしばしばで、決して理想的な夫婦とは言えなかったと思います。それでもやっとサラが九十歳になった時、イサクという名前の子どもが与えられていきます。

それから三十七年。サラは百二十七歳で亡くなります。今日の箇所には、アブラハムが墓を買って、サラを葬るまでの経過が詳しく記されています。なぜ、こんなに詳しく書いてあるのか。ここにどんな恵みがあるのか。少しづつ見て参ります。

2 墓地を購入する

1) 外国人が土地を購入する難しさ

アブラハムは妻のなきがらを前にしてしばし嘆き悲しみます。そのことが少し落ちていくと、考えなければならないのはお墓のことです。ところがそこには大きな問題がありました。

アブラハムは、自分の故郷を棄て、神に

よって導かれてカナンの地、今のイスラエルの地域ですが、そこへ移り住みました。彼は自分で言っているように、土地の人たちから見ればよそ者です。アブラハムは、多くの家畜を所有し、使用人を沢山雇うほど裕福ではあったのですが、自分の土地を持っていません。墓をつくりたいければ、まず土地を買わなければなりません。けれども今の時代のように便利な不動産屋さんがある訳ではありません。また今であれば土地の所有権についてはきちんと届けをして管理できるシステムがありますが、当時はそんなものはありません。

いったいどうするか。地元の有力者のところに行って、ここではヘテ人と呼ばれる人たちですが、その人たちに土地を譲ってもらうよう、まず相談する必要がありました。

相談に行くのはいいですが、交渉はすんなりといくのでしょうか。どんな時代でもどんな国でも、やはりよそ者、外国人は特別の目で見られます。アブラハムも例外ではない。どんなに財産を持っていても、外国人に土地を譲るなんてとんでもない。そういう感情が働きます。もし土地を簡単に手に入れられるのであれば、とっくの昔にアブラハムは土地を買っていたでしょう。だから土地を持つことができなかった。でもいまはそうも言ってもらえません。サラを葬る土地が必要です。

2) 交渉

アブラハムは4節でこう切り出します。「わたしはあなたがたの中に寄留している異国人です。あなたがたのところで私有の墓地を私に譲っていただきたい。そうすれば私のところから移して、死んだ者を葬ることが

できるのです。」

もしここで、アブラハムが何の説明もなくただ「土地が必要なので売って欲しい」と言ったらどうなっていたらと考えると、今言ったように、ヘテ人たちは外国人に対して厳しい視線で見えています。とても売ってくれたとは思えません。

ところが、ヘテ人は6節後半でこう答えています。「私たちの最上の墓地に、なくなられた方を葬ってください。私たちの中で、だれひとり、なくなられた方を葬る墓地を拒む者はおりません。」

「どうぞ遠慮なく一番良い土地を買ってください。」緊張しながら土地を売ってくださいと言ったら、意外なことに快く承諾してくれた。まずは第一関門を突破できました。

ということで次の第二関門。こんどは、その土地の所有者であるエフロンのところに行って直接交渉に臨みます。ヘフロンも非常に好意的に受けとめてくれました。銀四百シケルで譲ることに話がまとまりました。これらの話し合いは、その土地の人々の聞いているところで行われました。今なら役所へ行って登記の手続きということをしませんが、当時はこのようにして所有権が正式に移されました。

3) 妻が死んだがゆえに

よかったよかった、ということですが、でも不思議に思いませんか。あれほど外国人に対して警戒心を持っていたヘテ人が、なぜアブラハムの申し出を好意的に受けとめてくれたのか。もちろん、アブラハムが土地の人たちから尊敬されていた。そういうことはあるでしょう。でも、今までアブラハムは土地を買えなかったのです。それが、いますんな

りと交渉を進められたのは何か特別な事情があると考えなければなりません。何でしょう。

アブラハムもヘテ人立ちも何度も念を押してくり返していることばに注目してください。「死んだ者を葬る」「なくなった者を葬る」このことばです。

昔、日本には「村八分」という制度があったそうです。村のおきてを破った者は、村の交わりからのけ者にされる。今のことばで言えば「しかと」をする。そういう制裁を加えて、集団として和を保とうとしたのでしょう。それを村八分と言う。なぜ八分なのか。二つのことだけは例外扱いしたと言うことだそうです。一つは村八分された家に火事があれば、村全体で消火活動をする。もう一つは葬式。人が死んだら、たとえ村の掟を破った者でも村全体で弔う。そういうしきたりだったそうです。

アブラハムのこともそのように考えると納得がいくと思います。外国人である彼が、なぜこんなにすんなりと土地を手に入れることができたのか。妻が死んだからです。死んだ者を葬る大変さは、外国人であろうがなかろうが関係ない。あなたは外国人だけれども、妻を葬るための墓として使うなら土地を譲りましょう。そんな事情が働いたのだらうと思います。

これはなんとも皮肉なことです。と言うのは、アブラハムは神さまからこんな約束をいただいていたからです。「わたしは、あなたの滞在している地、すなわちカナンの全土を、あなたとあなたの後のあなたの子孫に永遠の所有として与える。わたしは、彼らの神となる。」(創世記17章8節)

カナンの全土を永遠の所有として与える

と言われていながら、アブラハムが実際に自分の土地を所有できたのは、お墓だけです。それもサラが死んだとき。

土地を買うということは滅多にしないことですが、人生の中で何度か買う場面に遭遇することはあるでしょう。まず自分の家を建てるために土地を買う。自分の農場を広げるために土地を買う。まず生活に必要な土地が優先されます。そして最後にお墓を買う。そんな順番でしょう。

アブラハムは、神さまから約束をいただ来ました。それなのに彼が生涯の中で手にできた土地はお墓だけだった。普通とは順番が逆です。神さまは嘘をついたのか。もちろんそんなはずはない。ではどういうことか。

3 イエス・キリスト

1) 墓に葬られる

この三月に行かせていただいたイスラエル旅行では、イエス・キリストが葬られたと考えられているお墓にも行くことができました。土を横にくりぬいてつくられた墓で、中に入ってみると思ったよりも広くて、天井は少し低いのですが四畳半くらいの広さがありました。

イエスは、十字架で死んだ後、日没前に人々が急いで処置をして墓に葬ったことが福音書に出て来ます。死んだ者を墓に葬ることはごく当たり前のことです。でもよく考えたら不思議ではないですか。十字架で死んでくださった方は、この世界を造られた神の子です。神である方がどうして墓に葬られるのでしょうか。当時のしきたりです、たとえばもちろんそのとおりです。でも、神がなさることです。すべてのことに意味があるはずではありませんか。神である方が、人間のつくつ

た墓に葬られたというのなら、それは私たちに大切なことを教えてくださるためではなかったか。

アブラハムはサラが死んだとき、嘆いて泣き続けました。サラが元気であったときにはいっしょに泣いて、いっしょに悲しみ、いっしょに喜び、そして時にはけんかもしてきた、愛する妻を失った悲しみを抱えながら、妻のなきがらを葬ろうとしていきました。それは墓がなければ困るから、という単純なことではないと思います。

2) よみがえる

墓に葬ることにアブラハムはこだわります。他人の土地に葬るのではなく、自分が所有する土地に葬ることにこだわります。もつとえば、神が約束してくださったカナンに葬ることにこだわります。なぜですか。アブラハムは何を見ていたのですか。

サラは死にました。しかしアブラハムは信じます。神は必ずこのサラをよみがえらせてくださる。今は会うことはできなくなって悲しいけれど、この墓の中からサラをよみがえらせてくださる。その約束の場所として神はカナンの地を与えてくださったのだと信じている。そういうことではないですか。

3) 死んだ者が葬られるところが約束の始まりとなる

そうしますと、墓は私たちにとってどんな場所になるのか。もちろん死んだ者を葬る場所です。でも同時に死んだ者がよみがえる場所でもある。それが本当であることを、まず主ご自身が示してくださいました。主が葬られた墓に行ったとき、主のなきがらはありませんでした。主がよみがえったからです。

私たちの心の内には、アブラハムと同じように大切な家族を失った思いがあります。悲しみながら家族を墓に葬りました。しかしアブラハムは信じました。墓こそ、約束の地をいただいていく最初の始まりである。私たちが最も悲しんだ場所こそが、やがてもっとも喜びにあふれる場所になる。そのことを信じなさい。主はそうのように語ってくださいます。